

## 資料

シアン・レイノルズ著

# フランスの女性と男性と一九三六年のストライキ

岩村 等 訳

ドルドーニュ県のある村の退職教師であるシュザンス・ラコールは、レオン・ブルムが彼の内閣で彼女に次官の地位を提供しようとしていると聞いた時に、前もって取り急ぎ断った。ブルムは、次のように返答した。

拝啓

私は、あなたの拒絶にカブトを脱ぐつもりはありません……あなたは何かをし「arriver」しなければならないのではなくて、ただ活気つけて「vivre」ほしいのです。なかなか、あなたの役割は、そこにいることなのです。というの、あなたがいるだけで重要な意味をもつからなのです（イタリック体は筆者）<sup>(1)</sup>。

本稿では一九三六年の女性大臣たちを扱うつもりはない。しかし、彼女たちは、我々が人民戦線期のフランスでの二つの性の「存在」を評価することをどのようにして始めることができるかを問題にすることによって、出発点となるにふさわしいのである。驚く程にしばしば今日でさえ、フランス人民戦線または第三共和制についての多くの概説史のなかで、レオン・ブルムの有名な三人の大臣たちについての古典的な言及は、それ以外の残りの部分に女性がほとんどいないということを伴う。ブルムの手紙で明らかにされたこの内閣での女性の象徴的な存在は、歴史の著作のなかで象徴的なままである。「第三共和制での女性」についての、公刊または非公刊の今日に至るまでの大部分の著作は、どんなに著名なものであっても、なお、

料「全体の歴史」のなかに組み込まれるよりもむしろ、「女性の歴史の領域」と言つてよいものに限られているように思われる。

「女性の歴史」(women's history)と「女性解放史」(feminist history)という用語は、時には同義的に使用され、時には相互に対立させられる。ここでは、女性の歴史は、女性を主題として扱う歴史を意味するものと解され、女性解放史は、性と性的諸関係という概念を使って全歴史を見ようと試みる歴史であると解されよう。本論説は主として女性を扱うつもりであるけれども、私の目的は、特別な事件、すなわちフランスの人民戦線の顯著な特色であつた一九三六年のストライキの波をフェミニストの立場で解釈することを示唆しようと試みることであつて、男性も女性もどのような単一の一元的な体験をしなかつたことに留意しながら、「どのような方法でこのストライキが男性と女性とによつて異なつた形で体験されたか」という問題を検討したい。

外のものと同様に、女性解放史は、著述と言葉の使用の方法である。過去が別の領域であるので、彼女たちがそこで違う言葉を使ふことは驚くべきことではない。同時代の資料は、我々の言葉を使用する我々の問題に常に答えを出すとは限らない。一つの例、後に続くものにとつて重要な例を取り上げると、一

九三六年五月から六月にかけてのストライキについての叙述は、しばしば男性と女性の労働者を区別しない。フランス語 *ouvrier* は、男性労働者を意味するが、労働者の大部分が女性 *ouvrières* であることを我々が知っている産業に言及するときにも、公文書や統計や同時代の出版物を含むすべての資料の多くで使用されている。その時のほとんどの時間を隔離された仕事場で他の女性たちとともに働いていた、一九三〇年代の工場生活を最も印象的に第一人称で記述する著述家であるシモーヌ・ヴェイユ自身が、労働者階級について全般的に主張するとき、*ouvriers* について語るのである。二次的な資料は、それらの資料の著者たちが性についての問題を問うことに関心をもっていないから、これまたしばしば救いがたい。それでルノー自動車工場についてのかなり多数の文献があるにもかかわらず、例えば、そこからどれくらい多くの女性が一九三六年にそこで働いていたのかを見つけ出すことは容易ではない。<sup>(3)</sup>

たとえ主要な資料がいくつかの問題を持ち出したとしても、そして多くの二次的著作のアプローチが不十分であるとしても、ある種の総合を試みることを可能とする相当数の事実に基づく「女性の歴史」が少なくとも今日にはある。この資料のほとんどは、公刊されてはいないが容易に入手できるフランスの

学位論文の形を取っている。これらは、ミシェル・ペロが女性の歴史での「原始的蓄積」の段階と呼んだものに相当しており、研究の質が幾分不均等であるにもかかわらず、今日の何らかの真剣な研究の出発点となっている。以下の叙述は、これらの研究のいくつかのおかげである。

### 一九三〇年代の女性労働者

一九三六年のストライキについてある程度展望しようとするれば、一九三〇年代の女性の職業について少々予備的に言及しておくことが求められる。事実上、すべての統計は、一九〇六年から一九三六年までの間に実施された国勢調査に基づいている。国勢調査の資料を基礎にした多くの分析的な研究があり、それらは全体的な傾向について意見が一致している。<sup>(4)</sup> 手短に言えば、経済活動のなかでの女性の「現役」の数は、第一次世界大戦直後（多くの女性労働者が戦時中の職にまだついていた）に頂点に達して全労働人口の三九・六パーセントを占めた。一九二〇年代を通じて減少し始め、そして一九三一年から一九三六年までの間にやや落ち込んだ。次に、農業でまだ働いている非常に多くの女性たちを除外しても、工業部門からサービス部門への移動があった。一九三六年までに、女性は、全労働人口

の二七・六パーセントに相当しただけである（一九〇六年には三四パーセントであった）。しかしながら、今日では、特に大恐慌の間に、ごく短い期間を基準として非常に多くの女性たちが仕事についてたり離れたりしたから、公式の数字がもっと複雑な実態を不適切にしか反映していないということが考えられる。多くの労働者の生活の不規則性——レイオフ、工場の門の外での待機、臨時の仕事を求めている場所から別の場所への移動——に気づくためには、ただシモーヌ・ヴェイユの一九三四年から三五五年の『工場日記』(*Journal d'usine*)を読みさえすればよい。そして、パリでの聞き取り調査による歴史学の試みについてのカトリヌ・ラインの学位論文は、多くの女性の仕事の断続的な性格を確証する。<sup>(5)</sup>

女性は、同一の仕事をする男性と一緒に雇用されることはめったになかった。すなわち、今世紀の初期のころには、女性たちは、家事サービスと産業上は繊維産業と服飾産業部門とに集中していたのであって、これらのすべては、我々が対象とする時代には衰退していた。彼女たちの賃金は一様に低く、時には男性の半分よりもかろうじて多かったくらいで、彼女たちは、全体として労働組合員の数が少ない時期には男性よりも組合に加入するのが少なかつたようである。すなわち、カトリックの

CFTCの二五パーセントを女性が占めていたけれども、女性労働者はCGTの八パーセントであった。第三次部門の新しい仕事（飲食店やチェーンストアや百貨店）もまた低賃金であった。

一九三六年のストライキをみて特に興味深いのは、国勢調査の数値を非常に綿密に読み取ることに基づいて、シルヴィー・ジェルネによって最近の学位論文で示唆された発見である。<sup>(6)</sup>すなわち、工業での女性の数の全体としての減少は、実際にはフランス工業のもっと先進的な部門——アメリカ産の近代的作業工程が使用されていた軽工業、食品生産、化学、電気製品、自動車など——への移動であったことをおおい隠しているということであった。この領域では、女性たちは、圧倒的にOS (*ouvrières spécialisées* 一般工)であって、すなわちそれは、生産工程のある段階で機械を使用する半熟練労働者である。もう一度、女性労働者は男性労働者と直接的な競争関係にはほとんどなかったのである。いまやますます男性と同一の諸産業で働くようになったけれども、女性たちは、今度は彼女たちの地位によってなお分離されていた。女性労働者たちは、男性だけが彼女たちの機械の調子が悪いときに修繕にくる熟練した技術屋であると見ていた男性の世界には、女性の世界と同じようには

入って行かなかった——これは何人かの人々が第一次世界大戦中に一時体験した状態であった。

ジェルネは、この過渡期を作った女性の精神状態について語る興味深い事実を示し、彼女の分析は、どうして女性労働者が低賃金を受け入れたかというよく知られている主題のもとで丹念に調べている。ほとんどの少女たちは、裁縫で非常に不適切な「職業」訓練をまだ受けていたのであった。すなわち、多くの少女たちが最初の仕事を洋裁に求めた。洋裁業界では、速度が技能であった。すなわち、特により仕事が早いことは、女性が時間と競争で絶え間無く働いていた悪条件下の過重な出来高払仕事の姿であった。こうして、そのような女性たちは、古風な孤立した出来高払労働の倫理から、近代的な作業場の出来高払労働の倫理へと移ったのである。彼女たちは、流れ作業ではなくて、諸個人が自分自身の機械を監督する産業で雇用された。要求された仕事の出来高を作り出すことに対する強迫観念のような態度は、反射運動となることができた。『労働者の環境』(*La condition ouvrière*)で叙述されたように、シモース・ヴェイユの体験は、彼女のまわりの女性たちによって抱かれた彼女たちの早さについての誇りと同様に、(未熟で不器用な初心者として)彼女が彼女に求められた数百のボルトを作り出す

うとしていることについて感じた自暴自棄を生々しく伝える。低賃金の職についていたもう一人の知識人であるベルティエ・アルブレヒトは、この時一九三七年にラファイエット百貨店の売り場にいたが、女性たちが商品を包装してラベルをつける出来高払の仕事の一日を終えて家路についたときに、彼女たちの家族が彼女たちに落ち着くように訴えなければならなかった（「落ち着いて、お前は百貨店にいないんだよ」）ことを報告している。<sup>(7)</sup>

低賃金で、未組織で、労働市場の一定の領域に集中されていて、労働形態の特別な形態をもっていたので、一九三六年のフランス産業の女性労働者は、男性労働者と同じの環境を共有していたとは見なされないと、結論づけざるを得ない。同時に、一元的な「女性労働者の体験」というようなものがなかった。すなわち、女性の年齢、婚姻上の地位、日々の体験で相当の差を生じて計算される子供または年配の扶養家族の数などは一元的是ではなかった。ちょうど一つの例を挙げると、既婚女性は、失業給付を受け取る資格がなかったのである。

# 一九三六年の選挙とストライキ

いずれにしても、どこで、これらの女性たちは、人民戦線の

形成と一九三六年四、五月の選挙に取り掛かる興奮に入り込んだのか。女性たちは、この時期の群像画が十分に明らかにしているように、決して政治生活の中にいなかったのではないけれども、第三共和制の下では、もちろん投票することを許されていなかった。多分、産業ストライキを扱うこの論説の文脈上最も重要であるのは、女性の賃金が左翼諸政党による選挙運動で主要な問題であったという事実である。と言って、このことがはっきりさせられたのではない。すなわち、共産党と社会党の政治家たちによる「飢餓的賃金」に対する非難は、もっと一般的な言葉で表明され、彼らは、労働者階級を恐慌の矢面に立たせたとして、歴代内閣を攻撃した。しかし、薄給が実際に引き合いに出されるたびに、結局それは女性の全時間賃金であることが分かったのである（確かに、女性の給料の等級付を考える）と、薄給が女性の賃金である以外に考えられなかった。我々は、この段階で女性の声のざわめきを聞かない。全く男性のものである選挙で、男性の演説者たちは、そのように言わないで、多分彼ら自身はそれをはっきりとは分らないで、婦人について語っていた。女性の時折りの声が低賃金について不満を言うまでになったのは、選挙が終わってからのことであった。こうしてジュール・モクは、フェリックス・ボタンのような食

料品チェーン店に対する六月の団体交渉の間に女性の代表が彼女の社長に向かったのを見て衝撃を受けたことを思い出して、次のように言う。

社長見なさい、これが私の稼ぎです。私が来客のピーク時には売り子で、残りの時間はレジ係ですから、あなたは私を信用していると思います。私の稼ぎでは、私の生活費を払ってしまうと、一カ月に一足のストッキングも買うことができません。冬のコートがいるときには、私は売春しなければならぬのです<sup>(8)</sup>。

女性の演説の門は、ストライキ運動によってのみ開けられることになった。

一九三六年のストライキは、選挙の結果が判明したのとブルム内閣の形成の合間に発生した。ストライキは五月の第二週に始まり、マティニョン協定の直後の六月初めに頂点に達し、ストライキの「うねり」の性格が、幾つかは七月まで続くことを意味していたけれども、以後徐々に衰退した。ストライキが男性と女性の区分に対してどのような関係にあったのかは通常は探求されないけれども、ストライキの一定の側面はよく知られ

ている。ストライキは、製造業部門と大規模商業で圧倒的であった。公務員、運輸労働者、教師、郵便労働者は、ストライキを打たなかった。すなわち、全般的にストライキをやったのは、労働組合に組織されているのが最も少ない部門であって、ストライキをやらなかったのは最も組織されていた部門であった<sup>(9)</sup>。やがて大きな百貨店のように、パリに近い工場、特に軽工業、食品生産その他がストライキ運動で突出していた。こうして、我々が語ってきた女性労働者のほとんどがストライキに巻き込まれているのに気づいた——彼女たちのほとんどにとって、初めて彼女たちはストライキに参加した。後の論評や同時代の新聞報道は、多くのストライキ参加者の「素朴さ」についてしばしばある程度言及して、素朴さを性には関連させないで、素朴さが運動の自発性を証明していること、または素朴さがごまかしに対して自発性をすぎだらけにしていると主張している。しかし、ストライキ参加者の性的分布についての何らかの種類の体系的な印象がある訳ではなく、その証拠は、断片的なままで分散している。

ストライキと工場占拠の多くのイメージが映像に残っており、目撃者の記述が残存している。イメージは、しばしば女性の主として補助的な役割を示唆する。すなわち、補助的なもの

とは、夫や息子に工場の門まで食べ物の入ったかをもつて行くこと、またはだれかがアコーディオンを弾いているときに編み物をするということのような「女性らしい」ことをすることであった。二者択一的に、ある人は、「女性のより大きな戦闘性」に言及するか、女性たちを情熱家のように見なす。「女性たちはしゃべり過ぎる、女性たちはかなり野性的である、男性よりも悪い、本当に凶暴だ」<sup>(10)</sup>。救いの天使や口うるさい女を越えて観察し、女性の運動への参加、特に女性の参加が男性のそれとどのように違うかということについて何か新しいことを知ることとは可能であろうか。

恐らく編み物から始めることは、そんなに悪いことではない——編み物は確かに映画や回想の中で一面に広がる特色であった。「私は、これまでの生涯でそんなにたくさんの編み物をしたことはなかった」と、ラファイエット百貨店のB夫人は言う。<sup>(11)</sup>『ル・ポピュレール』紙の記者は、女性従業員が多数を占める百貨店についても解説して、「我々は店の中をぐるっと回ることができる……それは刺しゅうと編み物の本当の雑踏のちまたである。彼女たちは、来年の冬のウールのセーターをもつつもりだ」と書いた。<sup>(12)</sup>ある法学部学生は、その叙述がしばしば古典として描かれるが、一つの工場について報告した。

中庭で、女性たちは、日陰に座って、縫い物や読書をしたり、靴下のかがりを縫ったりしている。この夜八時に、彼女たちは家に帰るのを許されよう。階段で、男性たちはトランプをしたり、ビールを飲んでいる——ワインとスピリッツはストライキ委員会によって禁止されていた。<sup>(13)</sup>

この描写は、さまざまな形で何百回と繰り返される。浮かび上がってくると思われるのは、強制された余暇のこれらの時間がほとんど男性たちによって、正確には飲酒や喫煙やトランプ遊びのようなことをして過ごすべき余暇として過ごされたということであった。女性たちにとって、余暇は、全体としてありうべきものとは思われなかった——それは、彼女たちが手がしていることは罪深いことであると感じているかのようである。多くの衣服がまだ家庭で作られていた時代には、余分な時間——地下鉄の中や昼食時——は編み物で費やされた。このことは、もちろん本当に我々を驚かさないが——しかし、一九三六年の「喜びの爆発」は、しばしば余暇の発見として叙述される。女性たちにとって、このことは半分だけ真実であった。

次に、維持管理の問題と呼ぶことができることに立ち戻ろう。このことは、工場の門での食物のかごだけではなく、スト

料

資

ライキ参加者に食事を作る社内食堂で働くことを含む。疑いなく、多くの女性たちにとって、工場占拠は食料を供給しなければならぬことを意味した。しかし、原材料に関係する維持管理の形態もあった。量の評価は不可能であつて、男性もかかわっていたが、女性たちが特にストライキで危険にさらされた腐りやすい商品の損耗を防ぐことに携わっていたようだ。こうしたある毛皮の作業場では、「女性労働者たちが毛皮がだめにならないように毛皮を扱っている」<sup>(14)</sup>。食品工場では、特に、食品がいたむ危険があつた。CGTの食品連盟の指導者たちは、後に、「女性たちがそのとき安全な場所で食料品が加工されるようにするために余分の仕事をした。女性たちが男性たちよりもこのことにもっとかかわっていた。それは、彼女たちが本当に食物の価値を知っていたからである」と、回想した。<sup>(15)</sup>時には——重要なことであるが——、維持管理は女性たちにとっての新しい体験であつた。すなわち、ジュヌヴィリエの紡績工場で「女性労働者たちが機械の掃除をした」時に、彼女たちは初めて機械に触れることを許されたのである。<sup>(16)</sup>

探求しなければならない第三の領域は、すべての公文書や新聞または回想録からかなりはっきりと明らかになると思われるものである。それはすなわち、全員が女性労働者だけの工場で

の女性の行動と、男女が混在していた企業での女性の行動との間に、相違があつたということである。女性だけで全従業員を構成していたときには、彼女たちは、工場占拠を組織し、要求リストを作成し、経営者側と交渉するための代表を選び出すなどのことをした。従業員が男女によって構成されていたときには、たとえ女性が多数を占めていても、組織は（何人かの女性が代表に選ばれたり、選ばれることがなかったりしたが）常に男性によって運営され、女性たちの多くが家に送り返された（または、何人かは志願して、帰宅を許された）。こうして、二つのTSF（ラジオ部品）の工場では、全女性従業員が第一工場を占拠し、一方、男女混在の第二の工場では、女性たちは帰宅させられた<sup>(17)</sup>。多くの女性労働者を雇っていたコルベユのある靴工場では、「約一二〇人ぐらいの男性だけが工場の敷地に残っていた」。<sup>(18)</sup> フィヴリールの巨大な繊維工場では、「すべての女性」——圧倒的多数——と「男女の若い人々と五〇歳以上の男性が帰宅を許され」、管理のためにやや若い成人男子が残った。<sup>(19)</sup> レユニ百貨店で働いていたマルセル・ヴァロンは、「運動が男性によって組織され、代表は男性だけであつた」と解説している。男性たちは女性が「二つの考えをまとめることができない」と考えていて、彼らは、「彼女が中産階級で、難



間を処理できるだろう」から彼女に頼んだだけであると彼女は解説している。<sup>(20)</sup>ラファイエット百貨店の使用者側との交渉の代表団についての『ユマニテ』紙の中の写真には、五人の女性と二〇人の男性がいた——従業員の男女別のほぼ正確な比率の逆転であった。<sup>(21)</sup>この点で、暮らしの他の非常に多くの領域でと同様に、女性は、やらねばならない時には、彼女たち自身の問題を処理することが完全にできたように思われるが、しかし、男女が混在している状況では、女性が多数を占めているところでさえ、男性たちが支配権を握り、女性たちはそれを認めたのである。私は、ここで団結が欠如していたということをほのめかすつもりではないのであって——男性たちは、もっと早く解決することができるときに、しばしば女性の賃金要求のために頑張ったのである——、単に、男女の両性が、男性がいるならば、男性が管理するということを受け入れたように思われるということを示唆したいのである。我々はそうは考えたくないのだけれども、女性たちの共謀、またはもっと中立的な言葉を使うと女性たちの不本意な同意が、男性たちの指導では、考慮に入れられなければならない。こうして、何人かの女性たちのストライキの体験は、完全に関係者としてのものであったが、他の女性たちは、どのような指導からも排除されていた。

議論の第四の領域を設定するうえで、女性たちが家に送り返された主要な理由の一つが、不道徳のそしりを免れるためであったということは、ここで述べられなければならない。右翼の新聞である『グランゴワール』は、工場の門の背後の乱痴気騒ぎについて語った。『フィガロ』紙は、「女性のストライキ参加者と窓枠にもたれている男性の写真」をみたという、あるストライキ参加者の妻の言葉を引用した。『ル・プティ・ブル』紙は、「彼女たちは私たちの亭主を奪うためにストライキを利用するつもりよ。すべてが終われば家庭戦線で騒ぎが起ころわ」と言うもう一人の妻の言葉を引用している。<sup>(22)</sup>左翼の新聞は、すべてが非常に礼儀正しいと応酬した。『ユマニテ』紙は、「ストライキは」百貨店で「ピケを張っていて、一晩中とどまっており、その他の被雇用者と全女性が次の朝九時に戻るために帰宅する」と言った。<sup>(23)</sup>ルノーでも同じであった。モニク・クトーは、百貨店でストライキを見たが、右翼の新聞はその報道の中で性的相違を強調しがちであり——女性を気の進まない犠牲者か、または性的対象として示した——、一方で、左翼の新聞は、性的相違を取り繕おうと努めて、女性をちょうど男性のようであるとして褒めたたえた。すなわち、「男性労働者と同じように彼女たちの決意は堅い」、「男性労働者の仲間と

なるにふさわしい」などなどである。<sup>(24)</sup>しかし、左右の双方とも、女性たちを不道德の潜在的源泉と見ていた。このことを軽視するのは、おそらく賢明ではないであろう。すなわち、危機と非常事態はエロチックであり、集団的幸福感疑い無く性的感情を高めた。しかし、女性が騒ぎの原因として（男性のジャーナリストたちとストライキ参加者の妻たちとによって一緒に）認識されるのは、初めてではないが——そうして、労働者階級の女性たちは分裂させられた。

あるストライキ参加者の夫の言葉が、（第五に）一方で我々に、何か他のことがそのような興奮と並んで進行していたことを思い出させる。彼と彼の妻は、両方ともにストライキの側に立っていた。「しかし、同じ程度ではなかった。『彼女は、実に彼女は狂っていた。彼女は工場に八日間昼も夜もとどまり、家に帰って来なかった。私は、一週間の間、子供達の体を洗い、髪の毛をとき、しりをふいてやらねばならなかった』。彼の妻は、報道によると、『私は団結の外にとどまっていた』と言った。この話の結末は、夫が妻を連れ戻すために銃を持って工場に行ったということである。八日間の子供の世話と生身の人間にとって耐え難いことであった（そして明らかに新しい体験であった）。このささいな事件を報道した隔週発行のカトリ

ック系誌は、夫は「組合の団結よりもっと高度な理想——家族」のために、妻を殺すつもりでいたと解説しているのは、厳密には承認できないとしても、少なくとも理解できる。<sup>(25)</sup>家族は、女性が熟知している最高のものであった。一方で組合の団結は何か他のものであった。多くの女性たちにとって（多くの男性たちにとってもまた、だがもっと準備してから論証できることであるが）、六月のストライキ運動は、何らかの真に集団的な行動の最初の体験であったということは誇張ではない。もちろんこれまでに女性労働者によるストライキというものはない。あったけれども、彼女たちの工場での体験は、男性の体験とほとんど非常に違っていたのである。

一群の女性労働者は、特に新聞の興味をひいた。すなわち、百貨店の売り子たちであった。これらの主として若い女性のおしきせの優雅なドレスや化粧と、彼女たちの長時間労働と飢餓的賃金との間の心を痛ませる差異は、明らかに百貨店の顧客に衝撃を与えた。『ユマニテ』紙は、あたかも読者にとってはず期しないことであるかのように、「ラファイエット百貨店の二人の若くてかわいい売り子」の間のふと耳にした会話を記事にした。彼女たちは、「管理職たちが、労働者が頑張っているのを見」て「息を詰まらせている」と話し合っていた。<sup>(26)</sup>スト

ライキの後でアンリエット・ニザンが執筆していたときに、彼女が考えていたのは、そのような女性たち（しばしば筋肉労働者の娘であった）と、彼女たちが経験した集団活動の新しい体験についてであった。

編み物や小説は、よく彼女たちを地下鉄や列車の中で孤立させたものであったが、そこは、彼女たちが語り合い考えを交換することが許された唯一の公的な場であった。それから、彼女たちは家に帰って、彼女たちが現実<sup>(27)</sup>に過ごしていた生活と一致しない生活スタイルを継続しようとした。今や、彼女たちは、簡単に彼女たちの狭量で利己的な生活方法に復帰するだろうか。彼女たちは、共同体の温もりを放棄するだろうか。私はそうは思わない。……彼女たちは、相互信頼の雰囲気の中で生活することによって持つことができる喜びを体験してしまっ<sup>(28)</sup>た。

特に左翼の新聞では一切不足のないこの種の解説から、正確には彼女たちが集団的な関係で考えることが少なかったから、ストライキについての女性たちの体験は、男性のそれよりももっと緊張していたと結論づけたい気持ちになる。これが女

性を労働者階級に統合することとしての転換点であったと主張されて来たのであって、この時期の女性について著述していた何人かの人々にとっては、これが、信仰簡条の何か、さらには女性の信用を高めるものとなった<sup>(28)</sup>。労働者階級は、結局女性が一体化するよきものであるに違いないし、もし、我々がストライキについての男性と女性の体験を区別することに関係しているとするならば、これは、確かに一つの回答であろう。

しかし、それは、私が完全に満足を見いだす答えではないし、あるいはむしろ、それは多くの問題を避けている。もし、女性たちが——一九三六年六月に男女の何百万人の労働者たちがしたように例えばCGTのカードを取ることによって——組織された労働者階級に加わりつつあったとしても、彼女たちは、その独自の規則と慣習を持つ男性の世界、女性を長期にわたって無視して来た、あるいは女性がその世界の外にいることを望んで来た世界に組み入れられつつあったのである。もし、女性たちがこの世界に加入したとしても、それは男性の条件に基づいてであって、彼女たちの条件によってではなかった。統合は、新しい到達が何らかの方法で大衆の原型の構成を変更すること、そして、そこからすべての利害関係が代表されることを暗示している。このことが一九三六年に生じたことであるか

は全く明らかではない。どれくらい多くの女性たちがCGTに加入し、どれくらいの間とどまっていたかということを、知ることすら容易ではない。アントワヌ・プロストは、この時期のCGTの大衆的組織化についての最も完全な統計的研究を著したが、女性についてはほとんど言及していない。組合の会議の代表と名付けられるような労働運動での目に見える標準によると、大メトロン人名辞典の該当する巻の分析が示しているように（付随的に女性の歴史に大きな関心を払っている）、より多くの女性が一九三六―七年に突然目立っているのは確かに本当である。組合のあるいはむしろCGTの組合員数が、恐らく両性について、それが一九三六年に上昇したのとはほとんど同じように急激に低下した一九三七―九年の間にどれくらい多くの女性たちが組合にとどまっていたかは、依然としてはっきりしないままである。我々は、ストライキ運動の間に組織的に疑い無く支配的であった男性によって定義されたような階級闘争に女性結び付いた程度を知らないということを、言わねばならないだけである。さらに、階級的団結は、支配的な感情であると広く想定されているし、それは、特殊な女性的な団結の幾つかの事例をおおい隠しがちである。

このことは、マドレーヌ・トリボラティの証言の一部分に特

別な重要性を与える。マドレーヌ・トリボラティは、当時若い事務員であり、彼女が働いていた部門での団体交渉の話し合いに参加する数少ない女性のうちの一人であったが、CFTC、すなわちカトリック労働組合同盟の代表としてそうしたのである。彼女は、ミシェル・ロネーに次のように語っている。彼女がたまたまCGTの女性代表にあったときに、「彼女たちは、『女性の労働条件』に関係する面を擁護する共通の土台にすることに気づいていたのである。彼女たちの組合に対する忠誠心がどのようなものであれ、彼女たちの男性の同僚はこのことに非常に衝撃を受けた」<sup>(29)</sup>。そのような連合の普通でない性格を評価するためには、CGTとCFTCとの間の関係が、CFTCが首相官邸での会議の組合代表団に代表を送ることにCGTが同意しないというほどに敵対的であったということが思い出されなければならない。またCFTCは、一九三六年六月に困難な立場にあった。すなわち、公然とストライキと階級対決に反対していたが、にもかかわらずCFTCは運動に引きずり込まれたのである。その余波の中で、CFTCは、大体はCGTの影響に反対したい人々から新組合員を補充していた、と考えられる。

このことは、運動とともにある女性たちの団結の問題から、

これまた方程式の部分であるに違いない運動に反対する女性たちの問題へと、我々を連れて行く。資料の性格を考えると、ストライキ運動に対する女性の反対をそのようなものとして区別することは、容易ではない。しかし、女性が労働組合の世界にとって多かれ少なかれ部外者であるとするならば、そのうえ、少なくとも男性と同じか、ひょっとするともっと多くの一定規模の反対が女性労働者の側からあったと考えられよう。証拠は極端な寄せ集めであるが——六月の幸福感が消え去る記憶であり、ストライキがほろ苦さと逆襲の雰囲気の中で更新された——確かに秋の間のものであるが、同じ会社の女性事務労働者と筋肉労働者の間でのいさかいの二、三のかなり衝撃的な例が公に知られていて、前者はこれ以上のストライキに反対していた。時々、ストライキに敵対的な女性労働者あるいは女性監督は、「グルノーブルの監督」——家庭の「調教」の為に、仕事仲間によって選び出された<sup>(30)</sup>。質的な内容の証言が、カトリック・ラインの口述歴史の目撃者たちから生み出される。ラインは、彼女の標本の中の、ルノーやシトロエン、すなわち、だれもがストライキに参加した大きな工場で働いていた女性たちからのみ、人民戦線とストライキに対する熱望を見いだした。他の回答者の何人かは、矛盾する思い出をもっているか、または

彼女たちが本当には信じていなかったものについて行くことを余儀なくさせられたと感じていた。すなわち、「組合に加入させられたことについて」、彼女たちの一人は、——「私たちは、組合に加入した」というよりも、むしろ「私たちは、組合に加入させられた」と、言った<sup>(31)</sup>。女性たちのストライキに対する支持も、彼女たちの団結も、当然なことであると考えすることはできない。

いろいろな形態を取ったストライキ中の女性たちの体験が男性たちのそれと違っていたのとちょうど同様に、ストライキの結果についての女性たちの体験も男性たちのそれと同質のものと考えることは難しい。だれも性別上特別な要求についての一連の不満を実際に調べなかったし、それは、本論説の力量をはるかに越えている。ここそこで——そして百貨店が再び目立ってくるが——要求書<sup>(32)</sup> (démarches) には、女性たちの要求が載っている。すなわち、とりわけ店員が一時間ごとに五分間座ることができる権利、託児施設（一部の百貨店では既にあった）と気まぐれな解雇についての法典化された要求（セクシユアルハラスメントに対するひそかな言及<sup>(32)</sup>）。どのくらい大きな声で要求されたかを言うことは難しいけれども、明らかに要求が声と

料

資

なっていたのである。多分本当のところは驚くべきことではないけれども、もっと重要であるのは、同一労働に対する同一賃金の要求がないことである。要求書(cahiers)は、さまざまな形で賃上げを要求しているが、いつも低賃金労働者に対して高い比率の賃金の上昇を求めたのであって(マティニョン協定が明言したように)、それは実際には女性の賃金が実質上上昇することを意味した。しかし、彼女らはおもひ低賃金労働者のままであり、どこにも男性と女性の稼ぎを平等にせよと要求する声は(どちらの性からも)上がらなかった。

このことは、当時完全に気づかれないままであったのではなく、労働運動の外側にいたフェミニストが最も反応したようである。例えば、フランス女性の権利同盟のマリア・ヴェロースは、団体交渉から同一賃金が欠落していることについて、CGTの書記長ジュオーと内務大臣サラングロに手紙を書いた。ユリゲット・ゴードンは、『ル・コティディアン』紙に、この欠落は、経営者がそれに反対したからなのか、それとも男女の労働者が問題を提起しなかったからなのか、そのどちらであるのかと問う論説を執筆した。七月に共産党のジャック・デニコロによって開催された集会で、二人の女性教師たちは、六月に百貨店でのストライキ集会で演説しに行つて、CGTの組合官僚か

ら「前日CGTに加入したばかりの労働組合運動へのこれらすべての未経験な新組合員の前で、同一賃金の問題を提起しない」ように注意されたと言った。彼女たちは、組合規律に従わなかったのではなくて、そこで彼女たちは、なぜその問題が不適当であるのかとたずねた(彼女たちはあいまいに答えたデニコロに満足しなかった)<sup>(33)</sup>。議会でフェミニストの要求を支持していた政治家G・レルミット(Lhermitte)は、労働協約が不平等賃金の原則を大事にしているだけでなく、賃金上昇率を認めるとしても、男性と女性の賃金格差がさらにもっと広がっているのを指摘する手紙を、一九三八年にドラディエに書いた<sup>(34)</sup>。

同一賃金がストライキの要求から除外されたのは、見落としてあったからではなく、女性たちが同一賃金を示唆するうえで憶病であったか、またはそれを不可能であると見なしていた一方で、交渉にあたっていた人々——全般的にCGT——が同一賃金をあまりにも急進的な要求であると考えたからなのである。彼らは、産業部門で同一賃金をもたらす女性の雇用に対する危険についても気づかないということにはなれなかった(早くも一九二〇年代には、学校教師と郵便局の幾つかの部門の労働者に対して同一賃金が実施された)。危険の実態は、一九三六年以後女性の金属労働者に生じたことによって示される。同

一賃金ということではなかったが、賃上げは、男性と女性の賃金格差をかなり埋めたのである。カトリクス・ラインは、以下のように述べる一九三八年の報告を引用している。

男性と女性の賃金の差異は、もはや実業家が規律性や熟練度で劣る女性労働者を好んで雇用するには不十分であり……〔彼らは〕生産過程の変化とともに頻繁に変化する技術に適応するうえで一定の年齢以上の女性労働者が困難を感じたこととあわせて、労働協約で定められた女性に対する大幅賃上げを「非難した」<sup>(35)</sup>。

適応性について真実が何であるうとも、女性の賃上げは、女性の方にバランスを傾けることに役に立ったようだ。確かに、一方で、男性の失業率が一九三五年に頂点に達する（そして、こうして男性の選挙と結び付けられる）が、女性の失業率はずっと後——一九三八—九年——に至るまで頂点に達しなかったし、わずかではあるが全般的には景気回復の中でおおひ隠されていた。部分的には、ブルム内閣によって開始された軍事費の増大によって引き起こされた景気の回復は、そんなものではあったが、主として男性を雇用していた重工業で最も感じられて

いた。最低限少なくとも、このことは、男性と女性の間にある雇用と失業の差別的な様式を示している。<sup>(36)</sup>

別の相違があった。恐らく女性たちが、マティエヌ協定以後の情勢のもたらした諸問題によって男性たちと同じような影響を受けると同時に、——会社が社会立法やレイオフや一層のストライキその他に対応する余裕がないから、店を閉ざしていたので——彼女たちは、必ずしも利益を享受していた訳ではなかった。あなたの二週間の有給休暇を得るためには、あなたは、同一の会社で一年間働いていなければならなかった——これは、多くの女性もつていなかったものであった。最初の年には、ラグランジュの特別切符——海への旅行のための鉄道クーポン——は、女性の家長や失業者の夫をもつ女性労働者の手に入らなかった（これは一九三七年に変更されたけれども）。ベルティエ・アルブレヒトは、ラフアイエット百貨店の女性の多くが、彼女たちの新しい休日（過四〇時間労働制の結果）を「家を完全に掃除すること」にあててることを選んだと報告した。<sup>(37)</sup>

## 結 論

状況はきわめて複雑で、ここでは潜在的な諸問題の断片がわずかに触れられてきたに過ぎない。しかし、一九三六年の労使

紛争についての女性の体験が男性のそれと単純同質ものとされる

資

ことができず、また単純で一元的な女性の体験を指摘すること  
もできないということは、ある程度確固として言うことができる。  
この論説が扱ってきた産業労働者階級の女性は、随分たく  
さんのやり方で一九三六年のストライキを体験したのであろう。

すなわち、熱狂的だが締め出された新参者、ためらいがちな新  
組合員、活動的な記録係、初めて家以外で宿泊した若い娘、ス  
トライキ参加者の仕事のない妻で、食料を運び金銭について心  
配していた——などなどの形であった。これらすべての役割  
は、相互に作用しあいながら、階級と性別の両者が中心的な役  
割を演じた全体験の中で、可能であった。当時、そしてその  
後、そのような相互作用はほとんど認識されなかったし、性別  
の認識は特別に固定した形態を取っていた。人民戦線の男性の  
言葉は、女性たちが雇用されていようとなかろうと、男性が労働  
者階級の女性たちにとって本質上家庭的であることを当然の  
ことと見なしていたのを、はっきりと示している。我々は、デ  
ュクロが「女性たちの家庭の保護」と「民族の未来の為に団結  
することをフランスの女性」に呼びかけ、CGTの服飾労働者  
連盟の書記が、女性のストライキへの参加が、「それは実際に  
「我々の」パンと家庭の防衛、我々の子供達の生き残りの問題

である事を意味し」、そしてそれが「我々の要求の著しく自然  
な性格」を確証していると主張したのを発見した。<sup>(38)</sup> このこと  
は、女性を産業上の必要というよりも、「自然の」必要と巧ま  
ずに同一視しており、女性の「生まれつきの」役割が子供の世  
話である——たとえば、独身女性労働者（服飾労働組合の新組  
合員の大多数がそうであった）は、物事の性質上いるべき場所  
を持たないということを想定している。そのような諸説は、女  
性をそれ自身の資質によってプロレタリアートとして考えるこ  
とが難しいことを示している。労働者階級での性別は、同時  
に可視的であって不可視的である——それは、G・デュブーの  
ような歴史家が広範に読まれている教科書で次のような一文を  
書くことを可能としている。すなわち、「CFTCは、一九三  
六年以前にはその支持のほとんどを事務労働者と女性から得て  
きたが、今やCFTCは、もっと多くの支持を労働者階級から  
得ていた」。<sup>(39)</sup>

そのような心理的習癖が男性に固有のものであると示唆する  
のは間違っていない。カトリーヌ・ラインは、彼女の研究の中  
で女性たちの回想について解説して、次のように言う。「私は、  
彼女たちがそう言っただけ、次の点に固執したからそう言わなけ  
ればならない。すなわち、危機や不景気や失業や新聞や労働組



合や政治は、すべて男性に確保された領域であった。しかも、すべてのこれらの女性たちは、雇用されていて、彼女たちの日常生活で恐慌によって影響を受けており、新聞を読み、ある場合には組合に加入し、後には選挙権を得たのである。暮らしの中で女性が喜んで話をしようとするということ、虚偽意識または疎外という諸観念を思い出すことは、別の問題であろう。この論説が冒頭で扱い、しばしば人民戦線の下で平等に向かって女性が進歩して行くことの象徴として引用されているシュザンヌ・ラコールは、一九三二年のパンフレットの中で、未婚の学校教師である彼女でさえが、労働者階級の女性を「勇敢な闘士」すなわち一家の男性に慰めを与える人であると見なしていたことを示した<sup>(4)</sup>。

このように不正確でかつ断片的であっても、一九三六年のストライキについてのフェミニスト的な解釈は、おそらくフランスの人民戦線についての労働者階級の体験を統合するといういささかやっかいな問題を提起し、非常に多くの一般的な歴史的説明にみられる（しばしば無意識的な）性差を区別しない傾向に挑戦することができる。

原注

(1) 一九三六年五月末のレナン・ブルムからシュザンヌ・ラコールあての手紙『*Vétérans Socialiste*, 18 (mars 1960)』でラコールによって復刻された。

(2) 二つの文献群の間のすれは、英語の出版物よりもフランス語の方が広い。H. Dubief, *Le déclin de la IIIe République* (Paris, 1976) と J. Mayeur, *La vie politique sous la IIIe République* (Paris, 1984) は典型的であって、この三人の女性の大任を引き合いに出すものの、それ以上女性に言及していない。一方で、J. F. マクミラン（第三共和制の女性についてのもちろん書いてきた）は、著作全集の中で女性の歴史を彼の *Dreyfus to De Gaulle* (London, 1985) にかんがりの程度組み入れた。

(3) P. Fridenson, *Histoire des usines Renault* (Paris, 1972) 及び B. Badie, *Les grèves du Front populaire aux usines Renault*, *Mouvement Social*, 81 (octobre décembre 1972) 及び、女性たちがいつてはとんと伝えざるものがない。A. トゥームス *L'évolution du travail ouvrier aux usines Renault* (Paris, 1985) から、一九三〇年代の末期にルノーには三二一〇人の女性が働いていたことを発見することができる。しかし、これが労働者総数の約一二％を意味していたことを算出するため、トゥームスの独自の計算の構成を分解しなければならならず、それらの計算はまた言及されてもいない。

(4) J. Darric, *L'activité professionnelle des femmes en France; étude statistique* (Paris, 1947); M. Guilbert, *L'évolution*

- des effectifs du travail féminin en France depuis 1865, *Revue Française du Travail* (septembre 1947), pp. 754-77. 参照。数字は A. Sauvy (ed.), *Histoire économique de la France entre les deux guerres* (Paris, 1984) 第三卷の中の「モリス・ニコロの分担した章「Condition de la femme」」の H. Bouchardau, *Pas d'histoire les femmes* (Paris, 1977), p. 144, ニコロの「利用と形と提示」を参照。
- (e) C. Rhein, 'Jeunes femmes au travail dans le Paris de l'entre-deux-guerres' (第三期課程博士号「パリ第七大学」一九三七年), pp. 249ff.
- (e) S. Zerner, 'Ouvrières et employées la première guerre mondiale et grande crise' (第三期課程博士号「パリ第一〇大学」一九八五年)。
- (7) A. Fourcaut, *Femmes à l'usine en France dans l'entre-deux-guerres* (Paris, 1982), p. 235.
- (8) Léon Blum, *Chef de gouvernement 1936-7, actes du colloque* (Paris, 1967) p. 98.
- (9) Antoine Prost, 'Les grèves de juin 1936, essai d'interprétation', *ibid.*, p. 76. プロストは「労働組合員の数が金属や食品や繊維で非常に低かったと指摘しているが、このことを労働の性別上の区分とは関連させない。
- (10) 最初の引用文は P. Birgi, 'Femmes salariées, syndicalisme et grèves de mai-juin 1936' (研究報告「ISSI, 一九六九年」) p. 64. からであり、それは非常に有益な叙述的資料を含んでい
- る。第二の引用文は M. Couteaux, 'Les femmes et les grèves de 1936, l'exemple des grands magasins' (修士論文「パリ第七大学」一九七五年) からであり、それは「問題に対する取り組み方のうえでもっと分析的である。両者とも必読文献である。
- (11) Couteaux, 'Les femmes', p. 100.
- (12) 『ル・モンド』紙「一九三六年六月一八日号」(Couteaux, 'Les femmes', p. 66 より引用されている)。
- (13) H. Proureau, *Les occupations d'usines en Italie et en France 1920-36* (Paris, 1937), p. 143.
- (14) 『エマニテ』紙「一九三六年六月五日号」。
- (15) Birgi, 'Femmes salariées', p. 64. より引用されている。
- (16) 『エマニテ』紙「一九三六年六月五日号」。
- (17) 『エマニテ』紙「一九三六年五月二六日号」。
- (18) 国立古文書館 (AN) B B 18 3011「一九三六年のストライキに関する検事長たちの書簡集」(文書集 B B 18 3007-3012)。
- (19) AN B B 18 3009「シャニー地方「一九三六年六月四日」。
- (20) Birgi, 'Femmes salariées', p. 63. より引用されている。G. Lefranc, *Histoire du Front Populaire* (Paris, 1965) の付録にある「レニ百貨店を中心としたチェーン店についての M. コレットの報告を参照。
- (21) 『エマニテ』紙「一九三六年六月二日号」。
- (22) 『ル・モンド・ブルー』紙「一九三六年六月一日号」他の例とともに引用されている。Couteaux, 'Les femmes', p. 73.
- (23) 『エマニテ』紙「一九三六年六月一七日号」(イタリック体は

筆者)。

- (24) Contaux, 'Les femmes', pp. 77-8.
- (25) 『マダム・ド・ラクシオン・ポピュラー』誌、一九三六年六月二十五日号、一、五四二―三頁。ストライキ参加者の家庭調査。
- (26) 『エマニチ』紙、一九三六年六月九日号。
- (27) 『ヴァンドルディ』紙、一九三六年六月二十五日号に掲載されたH・ヒザンの論説。
- (28) ヒルジはこのことを主張し、M・コランは、*Ce n'est pas d'aujourd'hui* (Paris, 1975) 中のヒルジの研究報告に依拠する一節で、そのことを強く述べた。
- (29) M. Lannay, 'Le syndicalisme chrétien en France 1885-1940, origines et développement' (国家博士号論文、ペリーソルボンヌ大学、一九八一年)、p. 2, 304. と注 725 (CEICの女性の労働組合に非常に関心を持っている博士論文)。
- (30) 例えば、AN, B B 18 3009<sup>o</sup> ボルドー地方。B B 18 3011 (有名な「キエザンベルグ事件」)。B B 18 3007<sup>o</sup> エクス島。B B 18 3012<sup>o</sup> シルノーヌル、一九三六年七月——これらのすべての事例では、女性労働者たちがストライキ参加者と争っていた。
- (31) Rhein, 'Jeunes femmes', p. 280.
- (32) Contaux, 'Les femmes', p. 66.
- (33) 『マダム・ド・ラクシオン』誌、一九三六年七月号。Contaux, 'Les femmes', p. 79. を参照。
- (34) AN, B 60 246<sup>o</sup>、一九三八年二月一日付の、女性の参政

権と同一賃金についてのコンヴェンションから当時の首相タダラ4世宛の手紙。

- (35) Rhein, 'Jeunes femmes', p. 281.
- (36) Ibid., p. 285. Sullerot, 'Condition', p. 429. を参照。
- (37) Fourcaut, *Femmes à l'usine*, p. 237.
- (38) Birgi, 'Femmes salariées', p. 51.
- (39) G. Dupoux, *French Society 1789-1970*, trans. P. Watt (London, 1976), p. 212. (一九三六年以前も以後もCEICの多くの女性たちは繊維労働者であった)。
- (40) *Femmes Socialistes* (ペナンヌット、一九三三年) これはContaux, 'Les femmes', pp. 61-2. に引用された。Rhein, 'Jeunes femmes', p. 242. を参照。

# 「訳者あとがき」

本稿は、Stan Reynolds, 'Women, men and the 1936 strikes in France', in Martin S. Alexander and Helen Graham (ed.), *The French and Spanish popular fronts: comparative perspectives* (Cambridge University Press, 1989) の邦訳である。

一九八六年四月、イギリスのサウサンプトン大学で、フランスとスペインの人民戦線についての国際会議が開催された。その報告をもとに編集、刊行されたのが右の Martin S. Alexander and Helen Graham (ed.), *The French and Spanish*

料

*popular fronts: comparative perspectives* であって、この中に本稿で訳したレイノルズの論説「フランスの女性と男性と一九三六年のストライキ」も収められている。

資

シアン・レイノルズは、サセックス大学のレクチャラーであり、フランスの政治と歴史を専門としている。彼女の訳書として、Fernand Braudel の *The Mediterranean* (London, 1972-3) と *Civilization and Capitalism* (London, 1981-4) とがある。また彼女は *Women, State and Revolution: essays on gender and power in Europe since 1789* (Brighton, 1986) を編集し、あわせて同書に寄稿している。

なお、本稿は、一九九二年度大阪経済法科大学研究補助金助成による研究成果の一部である。